

中国人日本語学習者の異文化間能力を育む授業の実践例

劉碩（西安交通リバプール大学）

金璐璐（西安交通リバプール大学）

要旨

本稿では、中国蘇州にある西安交通リバプール大学（以下、XJTLU）の国際ビジネス専攻・日本語副専攻の4年生を対象とした日本語の中級の授業において、日本の小学校の日常を描いた短編ドキュメンタリーを視聴し、異文化理解を深めるための新たな気づきや発見、それらをどのように考察し、クラスメートと共有したかの過程について報告する。特に、学生の文化事象を発見、解釈、関連付ける力に焦点を当て、授業の具体的な内容を示すとともに、学生が日本の文化と自己の文化をどのように認識し、違いや共通点を理解するかを量的および質的に探る。実際、多くの学習者は自らの小学校生活をもとに、日本の小学校における規則や教師と生徒、生徒同士の関係の違いに注目した。

【キーワード】 異文化理解，深層文化，複眼的な視点

Keywords: intercultural competence skills, deep culture, multifaceted perspective

1 目的と使用した映像素材

1.1 目的

先行研究によると、文化の捉え方の一つである表層文化は衣食住など外から観察できる要素を指すのに対し、もう一つの捉え方としての深層文化はその背後にあるものの考え方や価値観など、「外部の観察者が相手の文化に入ってもすぐには見ることができないものである（石井他，2013:17）」と指摘されている。さらに、Lazar et al.（2007）は、表層文化と深層文化の要素を授業に取り入れながら、言語と文化を相互的に教えることを通して、学習者が複眼的な視点や自文化を相対化する視点を養い、深層文化への理解を深め

る事が重要であると提案している。

本稿では、日本の小学校の日常を記録した短編ドキュメンタリーを視聴し、異文化理解を深めるための新たな気づきや発見、それをどのように考え、クラスメートと共有したかの過程を報告する。主に、学習者の文化事象を発見、解釈、関連付ける力に注目し、具体的には、学習者が日本の文化と自分たちの文化をどのように認識し、違いや共通点を理解するのかについて探る。

1.2 使用した映像素材

使用した映像素材は、『*Instruments of a Beating Heart*』¹という短編ドキュメンタリーであり、米国の第97回アカデミー短編ドキュメンタリー映画賞の候補にもなった作品である。本作は、東京の公立小学校の1年間を150日間かけて密着取材した『小学校～それは小さな社会～』²という長編の映画から生まれたものである。この素材を使用した理由は以下の通りである。

まず、カメラは主に1年生の子どもたちが小学校という集団生活の一員としての規律と秩序について初めて学ぶリアルな姿に焦点を絞っているからである。そのため、日本の小学校の日常の習慣や、その裏にある文化的価値観を視覚的に具体化できると考えた。

次に、素材は23分間の長さでありながら、学習者が自らの文化において既に経験済みの小学校の日常のストーリーを持っているため、感情的に共鳴しやすく、異文化への理解や共感を深めることができると考えた。

さらに、作り手である監督はイギリスと日本の両方にルーツを持ち、実際に日本の公立小学校から日本国内のインターナショナルスクールを経てアメリカの大学に進学するなど、複数の文化の中で育ち、生活している方である。そのため、カメラを通して複眼的な視点で東京の公立小学校の日常を見つめている。

最後に、本稿の筆者の一人も、10歳で家族と共に日本に渡り、実際に埼玉県の公立の小、中、高校で学んだ経歴がある。そのため、日本の小学校において普通だと思われるありふれた日常を学習者たちがどのように捉えるの

かに非常に興味があり，この素材を使用した。

2 対象学習者と実践概要

2.1 対象学習者

対象の学習者は，XJTLU の国際ビジネス専攻・日本語副専攻の 4 年生 47 名である。学習者の総学習時間は卒業時まで約 520 時間であり，到達目標は CEFR の B1 レベルである。教材は，国際交流基金の『まるごと 日本のことばと文化』シリーズを使用している。学習者はこの教科書の特徴でもある，日本についてのさまざまなトピックに触れながら，日本語と日本文化をバランスよく学んでいる。学習者が視聴する小学校の素材の内容に関連する文化的要素として，主に『まるごと A1 かつどう』では，「日本語」のトピックにおいて「名前の呼び方」が取り上げられ，また「生活」のトピックでは「小学生の登下校の様子や塾の様子」が扱われている。

2.2 実践概要

実践の活動は前学期で『まるごと中級 2 B1』の「私の街の交通機関」というトピックを扱った後に行った。このトピックは主に「交通機関」の話題を切り口に，日本と居住する街の公共的なルールやマナーを比較し，それに対する感じ方を共有する内容であった。

実際には，90 分の活動を対象学習者の計 3 つのクラスでそれぞれ 1 回ずつ行った。具体的には，簡単な導入を行った後に約 20 分間の映像素材を視聴し，3～4 人のグループディスカッションを約 45 分間実施した。映像素材を視聴した直後にグループディスカッションを行うことで，学習者同士の意見交換や批判的思考の促進を図った。学生は主に母語である中国語を用いて意見を交換していた。その後，個人の振り返りとしてアンケートを実施した。

3 学習者からのフィードバックと考察

3.1 調査方法と満足度

まず、クラスの活動の直後に実施したオンラインアンケートには 23 名の学生が回答した。さらに、その約 2 週間後にはアンケート回答者の中から 8 名の学生に対して、約 30 分から 40 分間の対面によるグループインタビューを行った。グループインタビューは主に中国語を使用して行った。

学習者のアンケート結果から、視聴したドキュメンタリー素材および関連するクラス活動の満足度は非常に高く、全体の 87%の学生が「とても楽しかった」または「楽しかった」と回答した。(表 1)

表 1：満足度 (How much did you enjoy the experience?)

満足度	%
5. 非常に楽しかった	74%
4. 楽しかった	13%
3. どちらでもなかった	13%
2. あまり楽しくなかった	0%
1. 全然楽しくなかった	0%

3.2.1 違和感を覚えたこと

「視聴した短編ドキュメンタリーの中で違和感を覚えたこと」という問いに対して、約 82.6%の学生がドキュメンタリーで映し出されている小学校の「規則」に関連する要素に違和感を覚えたと回答した。具体的にどのような規則に対して違和感を覚えたのかについては、その半数以上の学生が「給食」の例を挙げた。(表 2)

給食に違和感を覚えた理由としては、自分たちとの習慣やマナーの違いに因る例が多かった。例えば、給食を食べる際の決まりとして、ほとんどの学生が、給食の残り時間を表示するカウントダウンタイマーが使用されているのを初めて見て、非常に驚いたとコメントしている。また、食事の際の習慣の違いとして、中国では一般的に急いで食事をすることは健康的ではないと考えられているため、給食を食べる時間の短さに違和感を覚えたという意見

も多く見られた。さらに、学生たちは通常、学校の食堂や自宅で昼食をとるという習慣があるため、教室での食事に対しても違和感を抱いたようである。

上記のほかに、小さい生徒たち自身による給食の配膳に対して安全性が心配になるという意見もあった。一方で、多くの学習者は給食のシーンにおいて、きちんと並び非常に静かに食べている生徒の姿から、強い規則性や集団性を感じたようである。

表 2：違和感を覚えたことは何か（複数回答可）

文化的要素	%	規則に関連する要素	%
規則	82.6%	給食	68.42%
その他	21.73%	上履き	26.31%
生徒同士の関係	8.69%	通学帽とランドセル	5.26%
教師と生徒の関係	4.34%	その他	5.26%

3.2.2 見たことがある文化的要素

短編ドキュメンタリーの中で『まるごと 日本のことばと文化』のテキストで学んだ内容や、日本のテレビドラマやアニメで見たことがある文化的要素があったかどうかという問いに対して、ほとんどの学生がここでも「規則」の例を挙げ、特に登下校の際に生徒たちが統一的に身に着けている要素などに注目した。（表 3）

その具体的な例として、登下校の際に生徒が身に着けている 1) 通学帽とランドセル、そして学校の玄関口での 2) 上履きの履き替えに関する回答が多く見られた。これらの決まりが中国ではあまり見られない、あるいはそもそも存在していないことから、多くの学生が非常に興味深く感じている様子であった。

特に上履きの履き替えについては、多くの学生が日本の小説やアニメ、テレビドラマで何度も目にしていると述べた。なぜこのような決まりが存在するのかについては、校内の清潔さを保つためであるという意見があった一方

で、非常に小さなことのように思えるが、全員が統一的に行っていることから学校の規則性や集団性の重視が表れていると感じた学生もいた。

「その他」の文化的要素として、課外活動などが挙げられた。そして、学校において勉強以外にも興味のあることに十分に取り込めることは非常に良いことだという声も多かった。

表 3：テキストの内容や日本のアニメなどで見たことがある要素は何か（複数回答可）

文化的要素	%	規則に関連する要素	%
規則	78.26%	通学帽とランドセル	44.44%
その他	17.39%	その他	44.44%
教師と生徒の関係	8.69%	上履き	38.88%
生徒同士の関係	4.34%	給食	5.55%

3.2.3 似た経験や異なる経験

視聴した素材と似た経験や異なる経験をしたことがあるかという問いに対して、「規則」に関連した回答に次いで、「教師と生徒の関係」や「生徒同士の関係」といった学校生活における人間関係に関する回答が集中した。（表 4）

特に、異なる経験の例として「コミュニケーションスタイル」の違いを挙げた学生が多く見られた。その中でも、ミスをした生徒に対する教師の注意の仕方の違いに注目が集まった。日本の都立小学校の映像の中で、ミスをした女子生徒が他の生徒全員の前で注意されて泣きじゃくるシーンに対し、多くの学生がその注意の仕方はあまり良くないとし、とてもかわいそうだと指摘していた。

その理由として、中国ではその場合、教師が該当する生徒を廊下などの比較的人が少ない場所に連れ出して、そっと注意をするのが一般的であると述べた。中国の学生にとって、クラス全員の前で叱られることは「面子を潰された」と考えられ、非常に恥ずかしくて嫌なことであるため、もしそのようなことがあれば、しばらくはその教師を恨みに思ってしまうという意見もあった。

表 4：似た経験や異なる経験は何か（複数回答可）

似た経験や異なる経験	%
規則	65.21%
教師と生徒の関係	43.47%
その他	30.43%
生徒同士の関係	17.39%

3.3 考察（一）

1999 年に米国で提唱された『21 世紀における外国語学習スタンダード』³では、文化理解のための方法として「三つの P」に整理されている。（図 1）この三つの P とは、行動・習慣の **Practices**、産物の **Products**、その背景となるものの見方の **Perspectives** である。特に、その背景となるものの見方には、意味、態度、価値観、考えなどの深層文化の要素が含まれている。

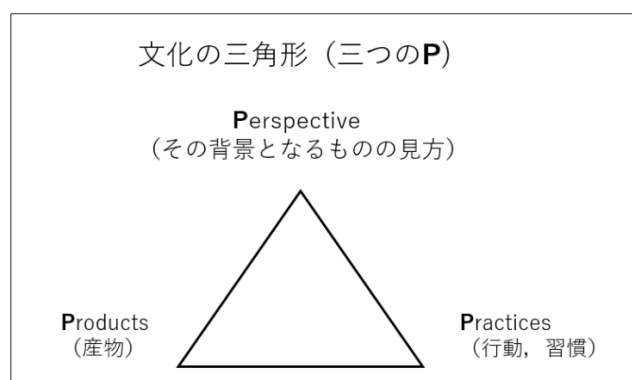


図 1：三つの P「21 世紀における外国語学習スタンダード日本語版」国際交流基金日本語国際センター 2002)

学習者の発見・気づきを三つの P の文化面のポイントで整理すると下記のようなになる。（表 5）

Practices（行動・習慣）においては、特に自分たちとの習慣やマナーの違いに関する例や、映像素材で初めて見た決まりの例が挙げられた。**Products**（産物）に関しては、主に中国には存在しない、ランドセルや通学帽など、

生徒たちが統一的に身に着けている要素に注目が集まった。さらに、**Perspectives**（その背景となるものの見方）として、多くの学習者が東京の公立小学校における規律重視の価値観や集団主義の強化を感じたようである。

表 5：三つの P の文化面のポイントでの学習者の発見・気づきの整理

Perspectives (その背景となるものの見方)	• 規律重視 • 集団主義 • 統一する
Products (産物)	給食のシステム, 上履き, 靴箱, ランドセル, 通学帽 ...
Practices (生活習慣・行動様式)	給食を教室で時間内に食べる, 小さい生徒自身による給食の配膳, 下校時に上履きを履き替える, 通学帽とランドセルを身に着けて登下校する...

3.4 グループディスカッション

グループディスカッションにおいて、自分の意見とは異なる意見があったかどうか、またクラスメートと話し合ったことで新たな気づきや再発見があったかどうかについて尋ねた。その結果、約 3 分の 2 の学生が再発見として、自分の小学校の規則や日課がクラスメートの学校とは異なることの例を挙げていた。

具体的には、a) 休憩時間の過ごし方の違い、および b) 通常の授業以外の課外活動の量の違いなどが挙げられた。a) の例として、ランチタイムの過ごし方や、ランチ後のお昼寝の時間が課せられているかどうかについての違いが見られた。

非常に興味深いことに、活動中の様子として、多くの学生が視聴した日本の公立小学校のドキュメンタリーの内容をきっかけに、自身の小学校時代の経験を共有していた。そのため、グループ内では思い出話に花が咲き、活発なやりとりが多かったことが非常に印象的であった。

さらに、インタビューからは、クラスメートの中に地域の差によって異なる体験をしていた人が多く、活動を通じて一緒に小学校時代の経験を振り返り、自分たちの体験の相違を見つけることが非常に楽しかったという声があ

った。また、中国の文化は日本の文化に比べて、南北の地域差が大きい関係で、文化の包容の範囲がより広いのではないかという声もあった。

3.5 考察（二）

以上のことから、日本の小学校の日常に関する素材が、学習者にとっては自己の文化を再評価し、他者との違いを理解するための重要なきっかけとなったようである。特に地域差が大きい中国においては、異なる体験を持つクラスメートとの交流が、自分たちの文化的多様性を理解する上での貴重な機会となったようだ。このことを踏まえ、さらに異なる文化背景を持つ学習者とのディスカッションを通じて、新しい発見や気づきにつながるのではないかと推察される。

4 今後の課題

今後は、特に海外の大学において、異なる文化背景を持つ学習者が同じビデオを視聴した際に気づく文化事象を比較し、オンライン国際交流という

「サードプレイス」を通じて他者と意見を共有・交換する力について分析したい。さらに、学習者自身の文化と異なる文化との相違点の他に、共通点や類似点についても取り組みたいと考える。

<注>

1. 『Instruments of a Beating Heart』 Directed by Ema Ryan Yamazaki (2024)
2. 『小学校～それは小さな社会～』 山崎エマ (2023) © Cineric Creative. NHK Pystymetsä. Point du Jour
3. National Standards in Foreign Language Education Project (1999) *Standards for Foreign Language Learning in the 21st Century*

<引用文献>

池田香菜子・長坂水晶（2021）「異文化理解能力の育成を目指したプロジェクトの実践-初中級レベルの多国籍日本語教師を対象とした段階的なアプローチの試み-」『日本語教育』178号,

https://www.jstage.jst.go.jp/article/nihongokyoiku/178/0/178_215/_pdf/-char/ja（2025年9月26日）.

石井敏・久米昭元・長谷川典子・桜木俊行・石黒武人（2013）『はじめて学ぶ異文化コミュニケーション-多文化共生と平和構築に向けて』有斐閣.
国際交流基金（2010）『日本事情・日本文化を教える』（国際交流基金 日本語教授法シリーズ 7）ひつじ書房.

国際交流基金日本語国際センター（2002）『21世紀の外国語学習スタンダード日本語版』,

https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/syllabus/pdf/syhonyaku_9-1usa.pdf（2025年9月26日）.

Lazar, I., Huber-Kriegler, M., Lussier, D., Matei, G., & Peck, C. (2007).

Developing and assessing intercultural communicative competence: A guide for language teachers and teacher educators. European Center of Modern Languages.